

第 146 話<軌道修正>の要約と参考資料

第 146 話<軌道修正>の要約

宮崎県は土呂久公害を否定した中間報告から 4 日後、突然「データが完全でなかった」と軌道を修正しました。この 4 日間に何があったのか？ 10 年後にテレビ・新聞記者が突きとめたのは、九州大学の倉恒匡徳教授から県環境保健部長にかかった 1 本の電話でした。

第 146 話<軌道修正>の参考資料

1 4 6 - 1 宮崎県が公害否定の中間報告

「一般住民にヒ素被害なし / 8 人に疑い / “土呂久”で中間報告 / 環境庁と調査専門委」
(1972 年 1 月 29 日西日本新聞)」

【宮崎】環境庁調査団をまじえた土呂久公害検討会は 28 日、宮崎県庁で開き、昨年 11 月中旬同県が実施した社会医学的調査の結果を中心に話し合い『ヒ素中毒の疑いがあるのは 8 人で、このうち鉱山労務者だった 3 人がヒ素の影響を受けている。他の住民にヒ素の被害はなく、過去の死亡者にも、とくにヒ素の被害を受けた証拠はない』との中間報告をまとめた。この報告から土呂久の被害者たちが強く望んでいる公害病の認定はむずかしく、環境庁は鉱山労務者だった 3 人について、ヒ素中毒症が立証されれば労働省と協議して労災保険適用の道を検討することになる。50 余年間、亜ヒ酸の煙害と鉱内水に苦しめられた土呂久の住民には“冷たい判断”で、こんごの調査の内容や方法をめぐり通常国会などでの議論を呼びそう。(略)

検討会には環境庁調査班の藤井正美・大気規制課、小川洋二・水質規制課、服部坦・公害 3 調査官、同県が委嘱した重松逸造・国立公衆衛生院疫学部長、土屋健三郎・慶応大教授、県側から黒木知事ら関係部課長、平嶋尚文・県医師会理事、同県試験研究機関ら調査に参加した関係者が出席。この調査を説明しながら専門家の意見を聞く形で進められ、同県の中間報告がまとめられた。

1 4 6 - 2 宮崎県が中間報告の見解修正

「宮崎県が見解修正 / 中間報告のデータ不足認める / 調査、幅広くやり直す / 死因にもまだ残る疑問点」(朝日新聞 1972 年 2 月 2 日)

土呂久鉱害問題について調査をすすめている宮崎県が中間報告の段階で「亜ヒ酸との関係は見当らない」「全住民の再検診は必要ない」と鉱害を否定するような見方を出し、被害を訴える住民から批判を受けていたが、同県環境保健部の安西定部長は 1 日記者会

見をし、今後の対策などについて改めて県の方針を発表した。その中で安西部長は「中間報告の基礎になっているデータそのものは完全ではないのでさらに資料を集める」「第3次検診の対象者以外についても詳しく幅広く疫学調査をする」など、これまでの見解を修正するような考えを示した。土呂久地区住民の激しい反発や、第2の土呂久といわれる宮崎県児湯郡木城村、松尾鉦山でも亜ヒ酸鉦害が表面化してきたため、方針の再検討を迫られた結果と見られる。(略)

また、土呂久地区で過去に死亡した人の死因に亜ヒ酸と関係ある疑いは全くなかったとしていたことについても「肺がんの死亡者については、ヒ素と接触したことはないかさらに調べる」として、死因についてもまだ疑問点が残っていることを初めて明らかにした。

146-3

西日本新聞聞き書きシリーズ「山峡のシンフォニー」第22回（聞き手 中山憲康）より

土呂久鉦害が告発された後、行政は素早く動きました。2日後の1971年11月15日には、宮崎県と福岡鉦山保安監督局が土呂久で合同調査を実施。県は社会医学的調査の方針を打ち出し、県医師会に委託して、11月下旬から12月にかけて土呂久住民約270人を対象にした第1次、第2次の健康調査を行ったのです。県は翌年1月28日に、調査の中間報告を発表しました。「ヒ素中毒の疑いがあるのは8人で、その他の住民にはヒ素の被害はない」。少数に軽い後遺症があるだけという内容でした。安西定環境保健部長は、疫学調査では「死因に異常もない。病気についてもヒ素の影響とみられるものはない」と完全否定しました。(略)

2月1日、突然安西部長が記者会見を開きました。「中間報告の基礎データは万全でない。さらに資料を集める」「対象者以外についても幅広く疫学調査をする」。4日前に発表した見解の事実上の修正でした。朝日新聞は「松尾鉦山でも亜ヒ酸鉦害が表面化してきたため、方針の再検討を迫られた」と分析しましたが、この4日の間に、見えなくてもっと決定的な力が作用していました。

西日本新聞聞き書きシリーズ「山峡のシンフォニー」第23回（聞き手 中山憲康）より

宮崎県の安西定環境保健部長が、社会医学的調査の中間報告でいったんはヒ素鉦害を否定した後、わずか4日で見解を修正するまでに、部長に電話してきた人物がいました。九州大医学部公衆衛生学教室の教授だった倉恒匡徳さんでした。「もっと慎重にやった方がいい」と意見したのです。中間報告の数日前、吉村健清、徳留信寛両助手を含めた九大公衆衛生学教室のメンバーが土呂久入りしました。倉恒さんは当時、異なった集団の症例を対照させる調査方法で、大分県佐賀関町（現大分市）で高かった男性の肺がん死亡率の原因を、銅精錬所作業者のヒ素暴露だったと突き止めていました。その調査手法は、土呂久でも生かせると思ったのです。一行は、鉦害を告発した岩戸小の教師や集落住民から聞

き取りし、役場や保健所から資料を収集して回りました。3 日間の予定を 5 日間に延ばし、調査を終えて福岡に戻った日に、宮崎県が中間報告したのです。倉恒さんは、土呂久にヒ素鉍害が起きていたことをほぼ確信していました。翌日の西日本新聞に「判断が甘い。もっと現地の人たちの体験を聞くべきだ。わたしが住民、被害者から聞いた話は、事実であったと信じられるものばかりだった」と厳しいコメントを載せました。

県は軌道修正するとともに、倉恒さんを社会医学的調査専門委員会に招き入れます。倉恒さんは委員長となり、7月の最終報告書で、7人を慢性ヒ素中毒症と認めました。「完璧な調査結果でないと公表しない」といわれるほど厳しい態度を貫いた倉恒さんが、最終報告書に盛り込んだ自身の調査が 2 つありました。民家のはりの上のはこりを採取して、鉍山からの距離とヒ素濃度との関係を明らかにしたこと。そして、先の症例対照手法を用いて、肺がん死亡についてもヒ素の影響を否定できないと記述したことです。

僕は県の見解修正後、倉恒さんを九大に訪ねました。「5年、10年後の将来、土呂久では発がんのケースが増えますよ」との指摘は、その通りになりました。現在では、ヒ素鉍害の認定患者が肺がんになったとき、行政はヒ素が原因と見なすようになっていきます。宮崎県は現在も、毎年土呂久住民の健康診断を行っています。他の公害経験地域では見られないことですが、これもまた倉恒さんが報告書の中で必要だと説いたことでした。

146-4 九州大学医学部公衆衛生学教室（倉恒匡徳教授）の土呂久調査

1972年1月25日西日本新聞

「土呂久にメス / 九大医学陣が現地調査」

【高千穂=宮崎県】「過去 50 年間も眠ったままになっていた土呂久公害の因果関係を突きとめよう」と九州大学医学部の公衆衛生学教室（倉恒匡徳教授ら 3 人）は 24 日、廃鉍公害が発生した宮崎県西臼杵郡高千穂町の土呂久鉍山跡に乗り込んだ。同公害に大学医学陣の本格的なメスが入られるのは初めてのこと。公害究明に大きな成果が期待されている。

倉恒教授らがこんど行なうのは同鉍山の過去から現在までの被害状況や環境などを詳しく調べる疫学調査。予定ではこの日から 3 日間、いちおうの予備調査を行ない、これに基づいて本格調査にはいる。調査項目は①鉍山②土呂久の自然環境③住民④その他資料、など。

同教授らはさっそくこの日朝から地元の高千穂町役場、同保健所、こんどの公害が表面化するきっかけをつくった岩戸小などを訪れて回った。地元側はどこも同教授らの調査に大喜び。役場や保健所では、さっそくコピーした資料を手渡すところもあり、こんどの積極的な協力を約束した。午後からは雨の中、土呂久地区の被害者宅を回り、被害の状況やからだのぐあいなどを聞いた。鉍口のすぐ近くに家がある佐藤操さん（38）方では、妻ツルエさん（49）から煙害が年輪にきざまれた杉の切片、長さ 3、40 センチまでしか育

たなかった 5 年前の稲わらなどを見せてもらった。これには同教授も、さすがにびっくりしたようす。同鉾山跡の鉾さいの山、鉾口、事務所跡も入念に調べた。

同教授は初日の調査を終わって『原因を突きとめるのが最終的な目的だが、それ以前に実態を正確につかみたい。ここは山と山の間が予想より、はるかに狭く、これが煙害を大きくしたと考えられる。亜ヒ酸が、すべての原因のようにいわれているが、このほかにもいろいろなものが混じった“複合汚染”の可能性が大きい。現在、地底や歴史の中に眠っているものをも掘り起こして、1 日も早く患者救済の道を探りたい』と言っている。

1 4 6 - 5 公害否定の中間報告と軌道修正の間に起きたこと

NHK 菅野道雅記者が倉恒匡徳教授から聞いた話（1981 年 10 月 23 日）

（桑原先生に電話をしたのは）私かもしれません。中間発表のとき、私は、県の環境保健部長や慶応大学の土屋（健三郎）先生にも電話して「もっと慎重にやった方がいい」と話しましたから。土呂久へ行って、私は土呂久住民にボーエン病と思われる皮膚症状がでているのを認めたことを覚えています。

読売新聞大堂眞圓記者が平嶋尚文医師から聞いた話（1983 年 10 月）

私が土呂久の健診の医師会の責任者としてやりました。当時としては、最善を尽くした健診だと思っています。桑原先生からボーエン病の報告がきていたのは事実ですが、もっと詳しく調べたうえでと思って、中間報告のときには発表しませんでした。